

『ハリー・ポッター』シリーズに見るゴシック趣味

青 嶋 由美子

I. はじめに

1997年イギリスで発刊された『ハリー・ポッターと賢者の石 (*Harry Potter and the Philosopher's Stone*. 1997)』は、イギリスのみならず、世界各国にハリー・ポッター・ブームを巻き起こした。第1巻に続くシリーズは第4巻までが世に出され、現在は、第5巻である『ハリー・ポッターと不死鳥の勲章 (*Harry Potter and the Order of the Phoenix*)』の発行が待ち望まれている。第3巻『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人 (*Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. 1999)』が出た時点では世界33カ国で翻訳されていたという。第4巻『ハリー・ポッターと炎のゴブレット (*Harry Potter and the Goblet of Fire*. 2000)』の日本での初版予約数は230万セットに上った。巻を追う毎に高まる人気は、7巻にわたると言われているシリーズ全体の成功を、その完結を待たずして確信させるに足るものと言えるであろう。この一連のシリーズ本の発刊は、イギリスにおける伝統的な児童文学の復権を成し遂げただけでなく、活字離れの進むこの日本という国においても、子供を活字に向かわせる契機ともなっている。ミヒャエル・エン

デ (Michael Ende, 1929-1995) の『モモ (*MOMO*, 1973)』や『はてしない物語 (*The Neverending Story*, 1976)』以来の久々の児童文学興隆期を迎えたのである。日本の児童文学出版界において、ハード・カバー本の隆盛を迎える大きな契機を与えてくれたとも言える。世界で、これほどまでに受け入れられているハリー・ポッター・シリーズの魅力とは、一体何なのであろうか。

児童文学を専門研究領域とする課程を、イギリスで初めてウェールズ大学に開設したピーター・ハント氏は、その魅力となる要素を次のように挙げている。

strong nostalgic/nature images; a sense of place or territory; egocentricity; testing and initiation; outsider/insider relationships; mutual respect between adults and children; closure; warmth/security — and food; and perhaps most important, the relationship between reality and fantasy.

強力な故郷への回帰や自然を恋うるイメージ; 場所や領域に所属するという感覚; 自己中心; 試練と成長; 部外者/内部の人の関係; 大人と子供の相互に向かう尊敬の念; 閉鎖; 暖かさ/安全, そして食物; そして恐らく非常に大切なのは、現実とファンタジーとの関係である。¹⁾

1) Peter Hunt. *An Introduction to Children's Literature* (Oxford University Press, Oxford. 1994) p. 184.

ハリー・ポッターのシリーズは、この要素をほぼ全て兼ね備えていると言えるのではないだろうか。乳児期に死別した両親への強い思慕の念は、そのまま喪失した家族という〈故郷〉への憧憬の思いである。ホグワーツ魔法学校 (Hogwarts School of Witchcraft and Wizardry) へ迎え入れられた時、ハリーは、生まれて初めて自分が所属する場所がある事を知った。入学前の生活では、親戚の横暴さに従う他なかったが、入学後は自己を見つめ自己を確立するための時間を持てるようになる。学校生活で、彼に次々と襲いかかる試練、それ等を切り抜け乗り越えていくことでの成長。また、このシリーズが七年間にわたるハリーの学校生活を描いたものになることから、彼の成長を扱った物語となる事は明白である。マグル (Muggle) と呼ばれる人間と魔法族の間に芽生えた関係—生粋のマグルであるハーマイオニー (Hermione Granger) と魔法族のロン (Ronald Weasley)、そしてハリーの間—に結ばれる友情—は、そのまま、本来所属する種族といった場を超えた関係の提示に他ならない。魔法学校の教授陣とハリー達の間—に存在する信頼関係は、年齢の差を超えたものである。魔法学校での寄宿生活で知り得た他人から寄せられる暖かい気持ち、又、ロンの家族から寄せられた親愛の情、さらに、ハリーの出自を知る魔法族の大人達から与えられる思いやりが、伯母の家庭で虐待を受けながら育ってきたハリーに安心感をもたらしている。学校の食堂での日常的な朝食、また、ハロウィンやクリスマスといった特別なイベントの際—に登場するディナーやデザート—の類いは、読者である子供だけではなく大人の気持ちをも

楽しませるものである。そして、大きな枠組みとして設定されている人間界という現実社会と魔法界というファンタジーの世界との融合。トールキン (John Ronald Reuel Tolkien, 1892–1973) の『指輪物語 (The Lord of the Rings, 1954–1955)』や C. S. ルイス (Clive Staples Lewis, 1898–1963) による『ナルニア国物語 (The Chronicles of Narnia, 1950–1956)』に代表される善と悪との戦いの構図も、含まれている。このようにハント氏が指摘した要素は、様々な形で充足されていると言える。ハリーの物語は、成功する要素に溢れた作品だったのである。

さらに、このシリーズの魅力となっているのは、イギリス小説界に於いては異端視される傾向はあるものの一つの伝統ともなっている「ゴシック趣味」ではないだろうか。各巻のあちらこちらで認められるゴシック趣味が、読者の心を煽り、繰り広げられるミステリーへの恐怖を深めていると思われる。魔術という、本来伝奇的な性質を持つものが物語の重要なファクターとなっているため、ゴシック的な傾向がより強く感じられるとも言えるだろう。イギリスでは、ゴシック・ロマンスは、18世紀中葉から19世紀初頭にかけて大衆に大いに支持された文学の一形態であった。正統派の小説家からは下等な読み物とみなされたが、大衆の支持を背景に大きな流れとなり、その影響は、アメリカ文学界にも及んだのである。ハリーの物語に描かれているゴシック趣味を考察するに先立ち、このゴシックの概念を纏めておきたい。

そもそも「ゴシック (Gothic)」という語は、「12世紀から15世紀にかけてヨーロッパで流行した建築様式に名付けられた

言葉であり、ゴート人 (Goths) による建築様式という意味が原義となっている²⁾という説がある。しかし、現在ゴシック様式の建築物とみなされる物全てが、この年代に作られたわけではない。完成年からすると、フランス・ブルーの葬祭教会堂、スペイン・ブルゴス大聖堂等は16世紀の建造物と言える。この時期の建築物は、ルネッサンス期に再び主張された「古き良き時代の伝統」と対立するものとして捉えられ、その様式を総称する語「ゴシック」は、良き古代を民族的・歴史的に異邦人が中断した事実に向けての蔑称として用いられてきた。

ゴシック建築の典型的な要素として挙げられるのは、ポインテッド (尖頭)・アーチである。それまでの建築物に用いられていたのは半円形アーチであった。それに代わるものとして、東方的なモチーフであった尖頭のデザインが、イスラム教寺院を除いて西洋に導入されたのは11世紀になってからのことである。以来、「トレーサリー」と呼ばれる装飾的な窓飾りのモチーフとして重用されてきた。時代的な考証から言えば、決定的な特徴とは言い難い面もあるのだが、「ゴシック」を表す構成要素の一つであることは確かである。

次に挙げられるのは、ロマネスク建築において登場した交差ヴォールト (穹窿) に肋骨のような印象を与えるリブを加えた交差リブヴォールト (オジヴ・ヴォールト) である。このリブを添えられたおかげで、ゴシック建築のヴォールトはより高さのあるものへと変化を遂げたのであった。

さらに、飛梁 (フライング・バットレス/アルク・ブタン) の登場が指摘されている。これは、建物が外へ向かって開いていこうとする力を、窓の外側からつかい棒のように支える物であり、この梁のおかげで、壁はより薄く、天井まで届く大きな窓 (多くはステンド・グラスを施した装飾的な窓) を作れるようになった。

その他に、ピアと呼ばれる大柱 (束をなす小さな円柱を添えた複合柱)、ピナクル (控え壁の重量を支える小尖塔)、破風 (ゲブル)、多葉式の薔薇飾り、多くのランセット (鋭尖アーチ) 等が挙げられる。³⁾

このような建築形態の特徴は、前時代の建築様式であるロマネスク建築とゴシック建築との差異を決定的なものとしていった。俗界から離れた辺鄙な土地に建てられた重厚で、時には鈍重な印象を与えていたロマネスク建築の時代は、「修道院の時代」と呼ばれることもあった。大聖堂に象徴されたゴシック建築は都市部のしかも中央に位置し、重量のある石材を用いながらも軽快なイメージを与えるべく先に述べたような様々な工夫が施されていたのである。推力や圧力を減じ散逸させる構造システムは、厚い壁を薄い仕切り壁 (クロワゾン) や飾り窓へと変え得たのである。より高く天を目指し、より多くの光を取り込もうとした大聖堂は、「神は光である」という聖書のテーゼを具現する「石の森」へと姿を変えたのであった。

それ (ゴシック大聖堂) は正に、ブナの木々が端正にまっすぐ立ち上がり、上方で

2) 福原麟太郎・吉田正俊編『文学要語辞典』(研究社出版、東京、1978) pp. 125-126.

3) ルイ・クロデッキ (前川道朗・黒岩俊介訳)『図説世界建築史8・ゴシック建築』pp. 6-25. 尚、本稿で用いた建築用語は、全てこの本に拠っている。

枝葉を張って交わり合い、明るい森を形づくる姿そのものである。大きな丸いバラ窓や細長い無数のステンドグラスから差し込む色光は、木々のほざまから洩れる陽光にほかならない。正に「神は光なり」であり、そのいい光こそ、都市民がかつて故郷でいつも森に求め、見出していたものであった。

ゴシック大聖堂には、森の木々の合唱がこだまし、暗闇にあらがう光の神秘が支配する。そこには石でつくり出された大らかな木の文化があり、美しさがあり、そして安心がある。都市民は一方においてヨーロッパに普遍性を実現しながら、他方においてその孤独な魂の帰るべき場所として、常に森を求め、森に恋していた。⁴⁾

蔑称であった筈の「ゴシック風」という言葉の意味合いは、次第に変化を遂げる。それは、宗教と深く関わり、後世再評価されたためである。ゴシック建築の時代は「大聖堂の時代」と呼ばれることがある。ローマン・カソリックの伝播が、同時に、この建築様式をも伝えたためである。宗教的儀式に用いられる建造物に、この様式が積極的に取り入れられた。より高く上へ伸びていこうとする様式が、神への道を象徴していると考えられたからであろう。大聖堂の内部を装飾し、言葉を読めぬ民への「見る聖書」として、また、神へと至る光の窓を装飾するためのステンド・グラス、大聖堂の外部ファサードに施されるキリストや救世主を中心とした使徒・聖人等の彫刻も、聖書と結びついて独特の図像学へと発展し、もはや建築だけに留まらないゴシック様式が確立されていったのである。

人々はこの地上に「神の宮居」を建てようとして「大聖堂の時代」を生きた。永遠の秩序と調和と栄光の「神の国」の地上の実現としての大聖堂は、まさに「神の家」であり、その建築構造も装飾も、神の摂理を映す「世界の鏡」であった。天空を目指して上昇する石の大伽藍は、天なる神の国への憧憬を表していた。石の重みを忘れさせながら立ち昇る石柱の森は、人々の燃え上がる信仰の心を表し、窓を透き入るステンドグラスの五彩の光によって神秘的にいろどられ、ロマネスクの瞑想的な聖堂とは違った、天上の世界への憧れを具現している。⁵⁾

では、このように大衆の神に対する思いを具現した建築物に纏わる語であった「ゴシック」が何故怪奇小説を表す「ゴシック・ロマンス」に用いられるようになったのか。これは、英文学史上良く知られた事実に関っている。ホレス・ウォルポール(Horace Walpole. 1717~1797)の居城が、ゴシック様式にのっとって建築され、その後彼が出版した本のサブタイトルに‘A Gothic Story’という語が付けられたことから始まるのである。イギリス政界の大立者ロバート・ウォルポールを父とするホレス・ウォルポールが、ロンドン近郊テムズ川沿いのストロベリー・ヒル(Strawberry Hill)にゴシック趣味の住居を建築したのは、1747年のことであった。これは、大聖堂のような高さはないものの、尖頭アーチの窓を持つ石造りの邸宅で、中へ入ると薄暗く気味の悪い城であったようだ。イギリスに点在するゴシック建築物の部分部分を切り取り、継ぎ接ぎして作り上げられた建物である。しかし、時代錯誤とも言

4) 『世界美術大全集第9巻・ゴシック I』(小学館, 東京, 1995) p. 16.

5) 『世界美術大全集第9巻・ゴシック I』(小学館, 東京, 1995) p. 20.

える、居住環境を無視したゴシック風建築の城は大流行となり、これを真似る貴族や金持ちが続出したと言う。一方、当時のイギリスには、17世紀から継承されてきた「ピクチャレスク (picturesque)」という概念が存在していた。それは、「恐怖と満足感という、二つのものを同時に引き起こしてくれるような」「片方で恐怖あるいは不快感を、しかし同時に壮大さとか、美しさとか、あるいは魂の感動とかを引き起こす」⁶⁾という事を意味している。ウォルポールは、この概念を具現する道具として小説を用い、人に恐怖を与えると同時に感動を与える枠組みに‘Gothic Story’と名付けたのであった。

さて、ここからは、何冊かのゴシック小説（ゴシック・ロマンス）の内容を見て、共通する要素を呈示していきたい。ハリー・ポッターのシリーズに描かれているゴシック趣味を把握し易くするためである。

まず、元祖とも言えるウォルポールの『オトランド城 (*The Castle of Otlanto: A Gothic Story*. 1765)』を取り上げてみたい。サブタイトルに「ゴシック物語」の語がついたのは、第2版以降である。設定は十字軍の頃のイタリア、キリスト教にとっての暗黒時代とされる12～13世紀のイタリアであり、これは、正にゴシック建築の時代と重なっている。オトランド城の城主マンフレッド (Manfred) と妻ヒッポリタ (Hippolita) には、二人の子供——姉マチルダ (Matilda) と弟コンラッド (Conrad) ——が居る。冒頭、不思議な言い伝えが紹介される。それは、「オト

ランドの城とその領主権は、今の領主が大きくなり過ぎて城に住めなくなった時、その領主から離れてしまう」という訳の分からない謎のようなものであった。城に伝わる不可解な予言を避けるために、マンフレッドは画策を続けるが、息子コンラッドは天から落ちてきた巨大な兜により圧死してしまう。超自然的な出来事が起きてしまったのである。後継者を失って狼狽したマンフレッドは、もう子供を産むことが出来ないヒッポリタの代わりに、息子の婚約者だったイザベラ (Isabella) と契り子供を作ろうとする。結婚を迫るマンフレッドから逃げようとしたイザベラは、小作人セオドア (Theodor・ジェローム神父の息子で、実はオトランド城の正当な後継者、つまり「出生の秘密」というセオリーの体現者) の父ジェローム神父 (Father Jerome) に助けられる。一方、マチルダはセオドアに好意を寄せている。セオドアとマチルダが逢引している時、マンフレッドはイザベラと間違えて、自分の娘マチルダを剣で殺してしまう。マンフレッドが狂乱状態に陥ると、凄まじい雷が起こり、オトランド城は崩壊してしまう。ここで、あの意味の分からない予言が実現されるのである。領主が大きくなるのではなく、城が小さくなったために、その領主が城に住めなくなったのだという思いもかけない形ではあったのだが。最後、正当な城の後継者であるセオドアは傷心を癒そうと努めてくれるイザベラと結婚し、マンフレッドとヒッポリタは修道院に入るのであった。

1790年代はゴシック小説最大のピーク

6) 小池滋『ゴシック小説を読む』(岩波書店、東京、1999) pp. 24-25.

時である。この時の代表作の一つが、アン・ラドクリフ (Ann Radcliffe, 1764-1823) の『ユードルフォー城奇譚 (*The Mysteries of Udolpho*, 1796)』である。作者ラドクリフには、「ゴシックの女王」という異名が付けられている。物語は、1584年、フランス・ピレネー山脈近くの田舎で始まる。植物に強い関心を示す父 (St. Aubert) と、天使のように優しい少女エミリ (Emily)。二人が釣り小屋を訪れた時、はめ板にソネットが鉛筆書きされているのに気付く。これが、エミリの運命を占う詩であった。母が死に、父と二人でエミリは旅に出るが、旅の途中、森の中で父も死んでしまう。父の遺言により唯一の親戚である父方の叔母シャロン (Madame Cheron) を頼って行く。シャロンは大金持ちのイタリア人モントーニ (Montoni) と結婚しヴェニスに行くというので、エミリもそれについて行く。暮らすことになったのがユードルフォー城であった。この城には、色々不可思議な出来事が起きる。誰かが打ち明け話を始めようとする、雷が鳴り、話が続けられない状態になってしまう。城の中には黒いベールのかかっている絵が飾られており、それは常に鍵の掛けられた部屋に置かれている。真夜中に城の中を歩き回る幽霊や死装束を纏った腐乱死体の存在 (実際には、城に監禁された捕虜だったり、蟬人形だったりする) も、エミリの恐怖心を煽り立てるものであった。モントーニが財産目当てにシャロンと結婚したばかりか、上院議員暗殺を陰で仕組んだ極悪人であることも暴露され、彼は処刑されてしまう。ユードルフォー城の女主人 (Laurentini di Udolpho) は、かつての恋人の妻 (St.

Aubert の妹) を嫉妬のあまり毒殺していたというエピソードもつく。この女主人とエミリが血縁関係にあることが判明し、ユードルフォー城は、エミリが継承することになる。

ゴシック小説ピーク時のもう一つの代表作がルイス (Matthew Gregory Lewis, 1775-1818) の『修道士 (*The Monk*, 1796)』であり、この舞台はスペイン・マドリッドである。優れているが故に他人の苦しみを理解出来ない修道士アンブロージオ (Ambrosio) は、聖者の如く民衆に高い人気があった。しかし見習い僧ロザリオ (Rosario) として男装して修道院に入り込んだマチルダ (Matilda) と関係を持ってしまう。一旦は破戒の罪に慄くのであったが、彼は、やがてマチルダに飽き、さらに墮落への道を歩み出す。告解にやってきたアントニア (Antonia) に惹かれてしまうのである。マドンナ像の向うに常に実際の女性を見ていたアンブロージオは、道徳一辺倒の禁欲者だという世間の評価からは縁遠い人物として描写されていく。さらに金に対しての俗物性も強いアンブロージオは、マチルダを操っていた悪魔 (マチルダは実在の女性ではなく、超自然的な存在) と契約を結ぶ。アントニアに向けられたジブシーの予言でも大きな伏線が張られていた。表面的な要素に騙されると運命をも変えてしまうという予言は実現され、アンブロージオの手により、アントニアは惨い陵辱を受け、母親エルヴィラは殺害される。超自然的な場面としては、終結部分が挙げられるだろう。宗教裁判所から脱出するため、アンブロージオは、悪魔と血の署名による契約を交わしてしまう。牢獄の天井が口を開け、悪魔に

腕を掴まれたアンブロジーオが破獄するシーンは、正にゴシック・ロマンスの真骨頂を示している。

『ノーサンガー僧院 (*Northanger Abbey*, 1818)』は、イギリス小説の真の創始者と呼ばれるジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) が記した痛烈なアンチ・テーゼを示すゴシック小説である。ゴシック小説隆盛の時代に、大衆が余りにもゴシックに憧れた事に対する揶揄が、この小説になったのだと言える。女主人公キャサリン・モーランド (Catherine Morland) は、生き生きとした外遊びが好きな若い娘として登場する。ゴシック趣味に関心を抱いているのだが、彼女の日常は平々凡々としたものにすぎない。彼女が望むような「非日常的な」出来事は全く起こらない。ミステリアスなティルニー一家 (the Tilney) に招かれてバースに在るその家まで旅をする。道中何か事件が起きるのではないかと、キャサリンは期待しているのだが、盗人は現れず、嵐も来ず、馬車が倒れてそれを救助するヒーローが登場するようなこともない。滞在先のティルニー家でも、現実的な出来事しか体験出来ずにがっかりする。チェストが開かず、やっと開いたと思ったらそこには一枚の紙が入っており、読もうとしたらランプの灯が消えるという如何にもゴシック的な事件が起きる。しかし、翌朝調べてみると、それは洗濯屋からの請求書であり、日常生活の典型的な部分が露呈されただけである。オースティンは、この中で「小説」というものは、日常生活を生きる普通の人々を描くものであって、奇想天外の人や事象を扱うものではないと、きっぱりと主張していたのである。ただ、オースティンは、この

『ノーサンガー僧院』で、実に多くのゴシック・ロマンスから引用をしている。パーソンズ夫人 (Eliza Parsons, 1740-1811) の二作品 (*Castle of Wolfenbach*, 1793. と *The Mysteries Warning*, 1796)、ロッシェ (Regina Maria Roche, 1764-1845) が記した『クラームント (*Clermont*, 1798)』、レイソム (Francis Lathom, 1777-1832) が書いた『真夜中の鐘 (*The Midnight Bell*, 1798)』、スリース夫人 (Eleanor Sleath, 1763?-?) の『ライン川の孤児 (*The Orphan of the Rhine*, 1798)』、ドイツ・ゴシックからの翻訳二作品 (*The Necromancer; or the Tale of the Black Forest*, 1794. と *Horrid Mysteries*, 1796)、さらにルイスの『修道士』、ラドクリフの『ユードルフォーク城奇譚』等である。ゴシックに反旗を翻すために、数多くのゴシック小説を取り込んでいたのであった。

以上の四作品を概観してきたが、他にも、夏目漱石が「神田へ買いに行った」と日記に記したベックフォード (William Beckford, 1759-1844) の『ヴァセック (*Vatheck*, 1986)』やラドクリフの『イタリア人 (*The Italian*, 1796)』、ゴシック小説でありながら社会小説の要素を併せ持ったウィリアム・ゴドウィン (William Godwin, 1756-1836) の『あるがままの現実、或いはケイレブ・ウィリアムズの冒険 (*Things As They are, or the Adventures of Caleb Williams*, 1794)』、社会に入りたいと願った怪物の悲劇の物語『フランケンシュタイン (*Frankenstein*, 1818)』 (著者はメアリー・ウルストンクラフト・シェリー, Mary Wollstonecraft Shelley, 1797-1851.), マチュール (Charles Maturin, 1782-1824) が教会批判まで書

き進んだ『放浪者メルモス (*Melmoth the Wanderer*. 1820), 当時の首相が読みたさの余り重要なパーティーをすっぽかしたというエピソードさえ持つウィルキー・コリンズ (*William Wilkie Collins*. 1824-1889) の『白衣の女 (*The Woman in White*. 1860)』『月の石 (*The Moonstone*. 1868)』等代表的な作品は枚挙に暇がない。

こういったゴシック小説に共通する要素として挙げられるとして、紀田順一郎氏は、次のように述べている。

1 城への招待. …城という伝統的なセッティングの紹介は、とりもなおさず、そこに住む人物像の系譜的紹介を意味する。…ゴシックは内部に衝撃をはらんだ一つの空間が既に存在している。その内側へ読者は招待されていくのである。

2 予言, 凶兆または危機. …ゴシズムが人間の上に定めた運命は暴力的で抗しがたい。

3 デモンの顕現. …すでに予兆をあらわしていたデモンが、いよいよその本姿を現わす。

4 出口なき迷路. …地下の廻廊や牢獄が、突如予期しない場所にあらわれ、運命あるいはデモンに追われる主人公を悩ます。この場合、迷路は錯綜せる人間関係のアレゴリーでもある。

5 城の崩壊. …ゴシックの城は、崩壊を前提として構築されている。…すべての建築は結果として廃墟となる。ゆえに建築は廃墟になった結果まで考えてつくられなければならないのだ。ゴシックに驚異の眼を見張った十八世紀の人々は、それが廃墟なるがゆえに、廃墟となる命運をになわされているがゆえに実在性を感じたのだ。それは胡散くさい、駆け足の安ピカ近代主義の論理に対する、有力な反措定で

あった。城はこの場合も提喩として採用されよう。⁷⁾

以上のような紀田氏の指摘は正にゴシック小説の正鵠を射るものである。しかし、このハリー・ポッターの物語は、まだ完結していないため、当て嵌め得ない項目が存在してしまう。まず第1巻より仇役として登場しているヴォルデモート (*Voldemort*) にどの程度の悪魔性を認めるべきかが問題となる。基督教的な悪魔観によって論ずるのであれば、魔術を学ぶハリー達にも悪魔性を認めなくてはならない。基督教の概念から論じないという立場を取れば、行為そのものの悪魔性=非人間性を考えるべきである。この点については、完結を待たねば解釈を下せないのではないか。さらに、「城の崩壊」という点についても、今後ヴォルデモートがどのような安住場所を見つけるかが書かれるまでは、考察出来ない。

本稿では、紀田氏の論とは別に、ゴシック性を認めるものとして次のようなキーワードを元に論じていくつもりである。まず恐怖心を起こさせるもの、次に現実世界から離れた地に在る城や館、時代的に古いもの、第三に雷や嵐といった天候や超自然的な現象、第四として異常な人間・風変わりな人間の登場、第五に出生の謎、さらに不可解な予言の呈示等である。テクニクとしては、「怖いけれども見たい」という人間の欲求を満たすためのサスペンスの使用が指摘されるであろう。

これらのゴシック小説に不可欠と思われる要素が、ハリー・ポッター・シリーズの中でどのように扱われているのかを、映像

7) 紀田順一郎・編『ゴシック幻想』(書苑新社, 東京, 1997) pp. 18-23.

を通して検証した後、巻毎に考察していくつもりである。

II. 映像に見るゴシック趣味

映画『ハリー・ポッターと賢者の石』で、実に印象的な場面がある。ロンドン、キングズ・クロス駅9と3/4番線から出発した列車がホグズミード駅に到着した後、新入生は小さなボートに分乗してホグワーツ魔法魔術学校へと向かう。低く雲の垂れ込めた空、そこから覗く青白い月、揺れる湖面を照らし出す幾つもの灯り、目の前に浮かび上がる学校の全容は、高い塔を持った難攻不落の要塞のようである。特徴のある音楽と相まって、現実からの浮遊感をとてつもなく強く与える映像であった。異世界への強烈な誘いの映像と感じられた。初めて映画を見た時、この映像こそが、ゴシック的な感覚を決定的にしているように思われた。

この章では、映画の撮影に使用された実在のゴシック建築物、又、ゴシック時代の建造物ではないものの中世の雰囲気の色濃く残している建築物を中心に、視覚に訴えるゴシック趣味を見ていくつもりである。

このシリーズの映画第二作目である『ハリー・ポッターと秘密の部屋』で、恐怖心に訴える視覚的効果が一番強く上げたのは、ホグワーツの内部に在る薄暗い廻廊、その壁に血塗られた文字で「秘密の部屋は開かれた、継承者の敵よ、気をつけろ (THE CHAMBER OF SECRETS HAS BEEN OPENED./ENEMIES OF THE HEIR,

BEWARE)」⁸⁾と書かれていた場面ではないだろうか。管理人フィルチ (Argus Filch) の飼い猫ミセス・ノリス (Mrs. Norris) が、窓木から硬直した状態でぶら下がる黒いシルエットと、血文字との色の対比。明るい陽射しの下であれば、もう少し冷静に事態を把握しようとする人間で居られる筈なのに、闇は全てを恐怖へと向かわせてしまう。ゴシック小説のテクニクである「サスペンスの継続」が幕を開ける場面である。

血文字が残されている場面は、映画の後半部分でもう一度出てくる。原作では、消す事の出来なかった“THE CHAMBER OF SECRETS HAS BEEN OPENED./ENEMIES OF THE HEIR, BEWARE.”という第一の血文字に続けて記されたとなっているが、映像では、新たな血文字が残されたという形を取っている。綴られたのは、“Her skeleton will lie in the chamber for ever. (彼女の骸は、永久にその部屋に葬られるであろう)”⁹⁾という文であった。第一の血文字の場面よりも明度を上げられた映像は、壁の地色と紅緋をした血の色とのコントラストを際立たせるものとなっている。

この第二の血文字の場面を撮影されたのが、グロスターシャー州に在るグロスター大聖堂 (Gloucester Cathedral) である。1327年のエドワード2世殺害とその埋葬、それに伴っての巡礼者数の急激な増加が、この大聖堂を、イギリスを代表するゴシック建築物へと変化させた要因であった。11世紀には既に建造されていた内陣

8) J. K. Rowling. *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. (Bloomsbury Publishing Plc, London. 1998) p. 106.

9) *Ibid*, p. 217.

には、それまでのロマネスク建築とは全く異なった装飾が加えられたのである。ゴシック建築の特徴である尖頭式かオジー形のランセットの先端が枠として使用された長方形のパネルによる装飾は、垂直式(パーペンディキュラ)というイギリス・ゴシックの新しい形態を具現するものであった。聖職者席を彩るステンド・グラスは、光を通して神の栄光を賞賛している。しかし、映画の中で用いられたのは、光溢れる神の居まし処としてではなく、仄暗さの中、ホグワーツの寮にずっと住みついている幽霊達が跳梁する場所としてであった。このグロスター大聖堂を『ハリー・ポッター』シリーズの撮影場所とするにあたっては、聖職者のみならず信徒の間からも反対があったと言う。長い歴史に支えられた教会であるから、当然のことであろう。聖書は魔術を認めていない、それだからこそ、中世の魔女狩りや異端審問が行なわれてきたのである。このシリーズには、勿論、魔術が中心に据えられている。反対の声が上がっても、何の不思議も無い。しかし、イギリス児童文学復権を成し遂げたこの作品に対する評価が高く、撮影賛成派の意見が取り入れられたそう。

このグロスター大聖堂の廻廊は、「イギリス一美しい廻廊」と呼ばれ、「囁きの廻廊」というニックネームを持っている。この廻廊が、血文字の場面に使用された。コッツウォルズ産の硬いオーライト(魚卵石)石灰石を用いたからこそ施すことの出来た複雑な文様が、天井を覆うファン・ヴォールト(扇形穹窿)に作り出されている。朝顔の花のようならっば形をなす半円錐状の面がずっと並べられ、そこには、平縁(フィレット/ムシエット)、オジー・アーチ、

薔薇飾り、四葉飾り、三弁飾り等が見事に施されており、一度この映像を見れば、必ず再認出来るほどの美しさで満ちている。第一作目でトロールがホグワーツの学内に侵入してきた際の女子トイレの場面、また、第二作では、水道管に棲む嘆きのマートル(Moaning Myrtle)が水浸しにする場面でも、ここの廻廊の一部が用いられている。

廻廊南西隅にある出入り口は、若干手を加えられて、グリフィンホール寮への入口として用いられた。「太った貴婦人(the fat lady)」の肖像画が掛けられた入口である。常に薄気味悪さの漂う場所である。さらに、ロマネスク様式のチャプター・ハウス(the Chapter House)は、寮内の部屋として撮影されている。

オックスフォードに在るクライスト・チャーチ(Christ Church)も、映像で見るゴシック趣味を際立たせた建物である。クライスト・チャーチは、9世紀に建築された聖フライズワイド修道院の跡地に建てられた。ウォルジー枢機卿によりカーディナル・カレッジとして創設されたのが1524年、その後、ヘンリー8世により1546年、宗教改革の一つとしてクライスト・チャーチ(元来はラテン語でCollege Aedes Christi)と命名されて再建されたのであった。そのような経緯から、クライスト・チャーチはオックスフォードで最大のカレッジであり、同時に、英国国教会オックスフォード大聖堂でもある。街全体が創設当時のゴシックの雰囲気を残している中、クライスト・チャーチもまた長い時の流れをその姿に留めている。特筆すべきは、ルイス・キャロル(Lewis Carroll. 1832-1898)であり、彼は『不

議の国のアリス (*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865)』を執筆する事で、学問の府クライスト・チャーチと児童文学を結びつけた。ここのオフィシャル・サイトでも言及されているが¹⁰⁾、ハリー・ポッターの映画の撮影が学内で行なわれ、場違いとも思われる児童文学の伝統がここに引き継がれたと言える。

映画の中で何度も登場してくるのがクライスト・チャーチの大ホールである。ここは、オックフォード内の最大の食堂として使われており、300人を収容出来る。ここの壁に掛けられている肖像画のコレクションは有名だが、撮影の際に動かされたのは、僅かに一枚だけだそう。壁を飾るステンド・グラスは、ゴシックの伝統をしっかりと表している。ホグワーツ魔法魔術学校の大ホールとしてそのまま用いられたこの食堂は、ホグワーツの生徒が一同に会する場面に必ず登場している。特にハリー達新生が初めてホールに入場する際の蝋燭が宙に浮かび、青い空が垣間見える幻想的なシーンは、見事な穹窿の効果もあって、不可解な魅力を伝えてくれた。ハロウィンのパーティの場面も同様である。クリスマス休暇、帰省しなかったハリーとロンがチェスに興じる場面では、その広さのせいで不安感を増すような印象を与えられた。

この食堂へと至る16世紀に造られた階段も撮影に利用された。新生が初めてホールに足を踏み入れる前、マクゴナガル先生 (Professor MacGoonagal) と出会う場面である。石造りの幅広の階段は、緊張感を含んだ重々しい雰囲気を十分に引

き立てていた。さらに、第二作では、トム・リドル (Tom Riddle) の姿が初めて登場するのがこの階段であった。

クライスト・チャーチの廻廊は、ゴシック時代よりも以前に作られたものである。ここは、ハーマイオニーがハリーの父親の業績を伝える場面で用いられた。クディッチのシーカーとして活躍した父親の記念物が飾られたトロフィー・ルームとしてである。重厚な造りは、ハリーの肉親への思慕の情とその死の秘密を映し出す役割を果たしていた。

同じくオックスフォードのボドリアン図書館 (Bodleian Library) も撮影現場となった。まず、ディビニティ・スクール (Divinity School) である。ここは、第一作目ではエンディング間近でハリーが運びこまれ、第二作目では骨抜きにされたしまったハリーが骨を再生させるためにベッドで過ごすこととなった。又、バジリスクと何からの形で接触して石となった生徒達が連れ込まれた部屋でもあるマダム・ポンフリー (Madam Pomfrey) の医務室として用いられていた。1420年頃に創設されたこの学校の天井は、1479年から1483年 (ゴシックの時代末期にあたる) にかけて作られ、イギリス垂直式ゴシック様式の見事な例とされている。デューク・ハンフリー図書館 (Duke Humfrey's Library) は、そのままホグワーツの図書館として使われた。実際に、中世から19世紀にかけての古文書を所蔵している図書館である。深夜、閲覧禁止の本を求めて図書館に忍び込んだハリーは、暗闇の中、手にした本から人の顔が飛び出

10) <http://www.visitchristchurch.net/harryp.htm>

し怒鳴られるという恐怖を味わうのだが、それはそのままゴシック小説の一要素となるであろう。

ウィルトシャー、ブリストル西部にあるレイコック寺院 (Lacock Abbey) では、中世、裕福な家庭出身の子女が修道尼として生活をしていた。16世紀、修道院としては解散し、その後1946年、ナショナル・トラストが管理を引き継ぐまで、個人所有されてきたのである。この聖具保管室が、スネイプ先生 (Professor Snape) の化学実験室として使用された。何本かの蠟燭を頼りに進められる魔法薬の授業は、常に陰気くささを漂わせている。

世界遺産の指定を受け、また、「ノルマンの君主」という異名を与えられたダラム大聖堂 (Durham Cathedral) も、このシリーズの映画の撮影場所として使われた。スコットランドとの国境近く、ウェア川に臨む二つの塔を持つこの大聖堂はロマネスク (ノルマン) 様式と初期ゴシック様式を併せ持っている。起源は998年にまで遡り、そもそもは聖カスパートの遺骸を安置するために建てられた木造の教会だったと言う。ノルマン・コンクエスト後、1071年にダラム城が建設され、1093年に大聖堂の建築が始められた。この大聖堂が完成したのは、1133年のことである。土台となった岩の非常に堅牢さが、この大聖堂の重厚な均整のとれた構造を可能にし、砦の役割を果たせる大聖堂としたのである。

ダラム大聖堂は、ホグワーツの様々な教室として、また、ホールとして変身させられたのであった。上部にホグワーツの「H」とふくろうの彫刻の施された柱が幾つも廻廊に置かれた。廻廊には採光しやすい大きな窓が並んでいるのだが、映像で見る

と、ただただ薄暗いのみである。南側側廊部トリフォリウム (外陣側廊上部のアーチと高窓の中間部分)、チャプター・ハウスも撮影に用いられた。

ノーサンバーランドに位置するアニック城 (Alnwick Castle) は、青空の下での授業の場面が撮影された。ゴシック小説に用いられそうな堅牢で重量感のある石造りの城を背景に、ホグワーツの生徒達はフーチ先生 (Madam Hooch) の指導の下飛行訓練を行なった。魔法界で大人気のスポーツ・クディッチ (Quidditch) の試合が撮られたのも、この城の庭である。堀に掛けられた跳ね橋そばの城への入口で、雪が積もった場面が撮影された。ふくろうの訓練も、この城の敷地内で行われたという。

1096年には、歴史書に既に名前が記されていたというアニック城ではあるが、内部は改築され、まだ二百年程しか経っていないため、新し過ぎて撮影には向かないと判断された。

この他にもロンドンに在るハーロウ・スクールの古い方の建物が、フリットウィック先生 (Professor Flitwick) の浮遊術の教室として用いられ、オーストラリア高等弁務官事務所がグリングotts銀行 (Gringotts Bank) として撮影されたりと、由緒ある建物が幾つも利用されている。

以上、数多くの撮影場所と映画での実際の場面を見てきたが、殆どの場面に於いて、その色調は暗いものであった。特にゴシック建築物について言えば、写真で見た場合の光に溢れる明るい印象は失せ、沈んだ陰鬱なイメージを与えている。また、そもそも光と隔絶されたロマネスク建築物も用いられて居た。これ等は舞台背景や

設定として、人の恐怖心を煽り、心情を負
の方向へと導く働きを十分に果たしている
と考えられる。ゴシックという語と結び
つく凶兆や混乱、破壊が起こり得る場所と
して、画面に大写しにされたのである。明
るいところで目にすれば何という事のない
ものも、ひとたび暗闇の中で目にするとそ
れは恐怖の対象となりやすい。その効果
が遺憾なく発揮された映像だったと言え
る。

さらに、実在する城や聖堂、寺院が多用
されており、これも、そのままゴシック小
説にステレオ・タイプである舞台設定を映
像の中に取り込んだと言える。用いられ
た場所そのものが、ゴシックを意味してい
るのである。

石造りの建築物を用いて重厚さを演出す
る。石造りであろうとも、やがては、廃
墟となるだろうという滅亡への予感を呈示
する。明るい筈の建築物から光を奪い、
何処で闇と繋がってもおかしくないような
イメージを浮き立たせる。足元の覚束な
い仄暗さの中、そこに張り巡らされている
かもしれない罟を常に意識させられる。そ
して映像につけられた短調の音楽。全て
が、恐怖感・神秘感を強めるための手段と
なっているのではないだろうか。

映画としてのハリー・ポッター・シリー
ズは、煽情的な場面を巧みに織り込み、観
客の視線を釘付けにし、ゴシック趣味を堪
能出来る仕上がりとなっている。

〈続く〉

書 誌

I. Primary Sources

Rowling, Joanne. Kathleen.

Harry Potter and the Philosopher's Stone. London: Bloomsbury Publishing Plc, 1997.

Harry Potter and the Chamber of Secrets. London: Bloomsbury Publishing Plc, 1998.

Harry Potter and the Prisoner of Azkaban. London: Bloomsbury Publishing Plc, 1999.
Harry Potter and the Goblet of Fire. London: Bloomsbury Publishing Plc, 2000.

II. Secondary Sources

Austen, Jane.

Northanger Abbey, Lady Susan, The Watsons, and Sanditon.: rpt. Oxford: Oxford University Press, 1980.

Collins, William Wilkie.

The Woman in White. 1860: rpt. Oxford: Oxford University Press, 1984.

The Moonstone. 1868; rpt. Oxford: Oxford University Press, 1982.

Godwin, William.

Things as They Are, or The Adventures of Caleb Williams. 1794 rpt. Oxford: Oxford University Press, 1982.

Hunt, Peter.

An Introduction to Children's Literature. Oxford: Oxford University Press, 1994.

Lewis, Matthew.

The Monk. 1794: rpt. Oxford: Oxford University Press, 1983.

Radcliffe, Ann.

The Mysteries of Udolpho. 1796: rpt. Oxford: Oxford University Press, 1983.

The Italian. 1797: rpt. Oxford: Oxford University Press, 1981.

Walpole, Horace and others. *Three Gothic Novels*. 1968: rpt. Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1983.

紀田順一郎・編. 『ゴシック幻想』. 東京: 書苑新社, 1997.

小池 滋. 『ゴシック小説を読む』. 東京: 岩波書店, 1999.

酒井 健. 『ゴシックとは何か』. 東京: 講談社, 2000.

志子田光雄・志子田富壽子. 『イギリスの大聖堂』. 東京: 晶文社, 1999.

惣谷美智子. 『虚構を織る——イギリス女性文学』. 東京: 英宝社, 2002.

『世界美術大全集第9巻・ゴシック I』. 東京: 小学館, 1995.

エミール・マール (田中仁彦他・訳). 『ゴシックの図像学 上・下』. 東京: 国書刊行会, 1998.

ジョン・ラスキン (杉山真紀子・訳). 『建築の七燈』. 東京: 鹿島出版会, 1997.

ルイ・グロデッキ (前川道郎・黒岩俊介, 訳) 『ゴシック建築——図説世界建築史8——』. 東京: 本の道社, 1997.

III. パンフレット

『Harry Potter and the Philosopher's Stone』 松竹株式会社事業部, 2001.

『Harry Potter and the Chamber of Secrets』 松竹株式会社事業部, 2002.

『Harry Potter and the Philosopher's Stone』 British Tourist Authority.

IV. ウェブ・サイト

<http://www.alnwickcastle.com>

<http://www.angelfire.com/mi3/cookarama/locations.html>

<http://www.angelfire.com/mi3/cookarama/locations2.html>

<http://www.angelfire.com/mi3/cookarama/locations3.html>

<http://www.angelfire.com/mi3/cookarama/locations4.html>

<http://www.britainexpress.com/architecture/early-english.html>

<http://www.gloucetercathedral.uk.com/2001/hpotter.asp>

<http://www.historic-uk.com/mi3/DestinationUK/HPotter.html>

<http://cidc.library.cornell.edu/adw/harrypotter.html>

<http://www.factmonster.com/ce6/ent/A0858436.html>

http://www.suntimes.com/ebert/ebert_reviews/2001/11/111601.html

<http://www.4yi.com/2001/111201HarryPotter/>

<http://www.us.imbd.com/Locations?0241527>

<http://www.visitchristchurch.net/harryp.html>

V. ビデオ

『Harry Potter and the Philosopher's Stone』 Warner Home Video, 2001.